

2012年6月23日

第10回 日中戦争史研究会

参加者（五十音潤，敬称略）

阿部満靖（愛知大学），石島紀之（フェリス女学院大学），王敬翔（愛知大学中国研究科），岡崎清宣（名古屋大学），貞平純一（可児市），柴田哲雄（愛知学院大学），玉置寛（小牧市），張鴻鵬（名城大学法学研究科），野口武（愛知大学大学院），馬場毅（愛知大学），肥田進（名城大学），本田正廣（愛知大学），丸田孝志（広島大学総合科学部），森久男（愛知大学），楊韜（名古屋大学），吉田曠二（名城大学）

（記録作成、野口武）

報告1：吉田曠二（名城大学）

「元陸軍中将遠藤三郎の肖像」

#### 【報告要旨】

関東軍参謀や大本営幕僚として日中戦争と深く関わってきた元陸軍中将・遠藤三郎が、戦後、なぜ非戦平和運動や中国との日中国交回復に向けた活動をおこなうに至ったのか、残された日記や旧日本軍資料に基づいて彼の考え方の変遷を辿った報告がおこなわれました。

#### 【質疑応答】（司会：馬場毅）

森：熱河作戦以降に塘沽停戦協定がおこなわれ、それを起案したのは遠藤三郎と言われている。長城作戦の際に関東軍が華北を取りたいという意図があったとされるが、遠藤三郎自身にも華北に関東軍の勢力を広げようという意図があったのか否か？

吉田：天皇は、軍は長城を超えてはいけないと制止していたが、板垣征四郎を初めとした関東軍中枢は北京でのクーデターを画策し、傀儡政権を推し進めようとしており、遠藤もその流れに乗っていたことが日記からは読み取れる。

森：私は長城作戦等における遠藤は河北まで勢力を広げる意図はなかったと考えている。彼の目的は、長城作戦によって数でまさる南京政府の中央軍を押し戻して長城を確保することであったと考えている。

吉田：板垣征四郎が進めていた北京におけるクーデター計画で、傀儡政権として立てる予定であった人物が暗殺されたことも関東軍の方針を決定づけた一因ではないだろうか？

森：熱河作戦では板垣征四郎などは関東軍と満州軍とともに、クーデターを利用しているが、遠藤は関東軍のみでやろうとした。

吉田：遠藤は謀略嫌いのでできるだけ傀儡軍も謀略も使わずに長城作戦を進めようとしていた。特に彼は天皇の統帥権を慮って作戦を立てていたが、主任参謀である彼の意見は十分に取り入れられなかった。

貞平：陸軍幼年学校に関しては戦没者遺児のみが学費免除であり、その他は無償ではなかったとされる。そのために遠藤自身は幼年学校では学費免除ではなかったのではないだろうか？

柴田：1927年からフランスで学んでいるが、そこで学んだ塹壕等に関する知識がソ満国境地下要塞築城などにも活かされているのか？また、1941年に重慶爆撃を指導とあるが、空軍での正式な教育は受けていたのか否か？

吉田：地下要塞建設は中央参謀本部からの指令であり、遠藤はその指令に基づいて築城に関わったわけであり、彼自身の発想ということではなさそうだ。また、彼の専門は重砲であり、空軍の正式な教育は受けていない。ただ、ノモンハン事件以降に日本で蟄居していた遠藤に、日中戦争の泥沼化によって急遽、陸軍の指揮を取るよう任命され、それ以降に身につけた知識が主なものなかったかと考えられる。ただし、メッツ防空学校でも教育を受けているので、彼のノートを検証することでメッツ時代の意義を明らかにすることも可能であろう。

張：レジュメにおいて遠藤は細菌兵器の使用に関して、防御法の問題により「使用不可」という同意をしているが、中国では山西省なども使われたことが明らかになっている。近年はどこにどれだけ投入されたことが明らかになっているが、遠藤はそのことを知っていたのか否か。

吉田：レジュメで述べているのは、対ソ戦での起死回生策としての細菌兵器使用の可否を問い合わせた場面であり、中国の事情とは直接的には関係ない。遠藤自身は、1939年以降に細菌兵器の実験に立ち会っており、人体実験やその影響などを理解していたと考えられる。

丸田：遠藤が私蔵していた極秘の関東軍資料に関してだが、関東軍における文書管理はどのようなになっていたのか？

吉田：遠藤は主任参謀であり、個人資料として閲覧・所持が可能な立場であったが、左遷後に廃棄指示に従わずに持ち帰ったものと考えられる。

馬場：遠藤は陸軍大学で対ソ戦に関する講義をおこなったとされるが、彼はソ連における政治社会情勢などの情報をどのように得ていたのか？また、対ソ戦の作戦を立てる際に「2～3週間での即決」と述べているが、独ソ戦などの状況を考えると非常にあやうい見通しであると思われる。こういった背景にある彼のソ連に関する情報をどのように得ていたのか？

吉田：彼の情報の大部分は陸軍の特務機関等から得られた情報であると考えられるが、彼自身も偵察機に乗り込んで自ら敵情視察を熱心におこなっていた。そこでかなり危険な目にもあっていたことが日記に残されている。彼自身は鉄道輸送量などに基づいて、戦争を有利に導くのであれば早期決戦という結論を出した訳であり、彼自身も持久戦になるだろうという考えはあったと思われる。

石島：実際にはノモンハン事件以降、対ソ戦不可という結論になるが、それはすでに日中戦争が泥沼化していたからなのか、あるいはソ連の軍事力が想定以上だったということなのか？また、彼は戦後の平和活動へと取り組んでいるが、そこでは自らの戦争経験をどのように語っていたのか？

吉田：彼自身が太平洋戦争を主導したことやサイパンでの作戦の失敗が、戦後の彼らの活動の根拠になっていると考えられる。また、ソ連の軍事力に関して年々強化されていることを述べており、彼が対ソ戦の構想を立てた1937年の時点であるが、1939年のノモンハン事件以降ではすでに戦力差があることを悟っていたと考えられる。

森：1933年に陸軍中央部での対ソ戦に関する議論があり、その荒木陸軍大臣の時代に作戦班長を務めており、その時代に彼はソ連に関する基本的な情報を得たと考えられる。さらに関東軍で作戦参謀となった際にはすでにソ連に関する知識は身に付けていた。

玉置：当時の陸軍の作戦参謀本部において思想的には異端的な位置付けであったのか？ソ満国境の地下要塞には現在は外国人でもアクセス可能であるのか？

吉田：遠藤自身はかなり非戦派の考えが強い。しかし、大学の成績で作戦本部に配属されることになった。彼自身が国際会議の随臣として同行した際に軍縮に関する発言をして、結局、その随行から外された経歴がある。そういう意味では彼はかなり思想的な異端であ

ったと言える。地下要塞に関しては、現在でも全て発掘作業が終了した訳ではないが、公開されている部分もあり、そこには外国人であってもチケットを買えば訪問することは可能である。

報告2：石島紀之（フェリス女学院大学名誉教授）

「抗日根拠地における党と民衆—太行抗日根拠地を事例に」

#### 【報告要旨】

抗日根拠地における共産党と民衆との関係性に関して、太行の事例に基づいて、その散漫な基層共産党組織の様子が、戦局が進むにつれて徐々に強固な組織として運営されていく変遷過程に関して説明するとともに、それを成し遂げていった共産党の政策や民衆同動員の原動力に分析がされた。

#### 【質疑応答】（司会：馬場毅）

丸田：地域性の問題として、基層では散漫な大衆組織であるが、上からの政治的な指示のもとでさらに散漫な組織になったり、あるいは逆に組織性が強化されたりする現象が太行でも冀魯豫でもおこなっていたと考えられる。すなわち散漫な基層政党組織と強固な上部政党組織との関係のなかで形づくられてきた個別地域の組織のあり方を考える必要がある。また、基層組織の流動性の高さに関してだが、そこに共産党の強みがあり、状況に応じて動員数が増えた大きな行動を起こせ、攻撃に対する回復力が高められる。そういった部分での動員力の高さに着目する必要があるのではないだろうか？

石島：実際には1940年代後半には共産党と国民等の選択の余地は小さくなっており、そこでは流動的な立場としての動員という形は取りづらくなっており、やはり基層組織としての散漫な形から強固な形への移行がおこっていたと考えている。

馬場：私は山東省での抗日組織の研究をやっていたが、その事例に基づくと、1940年までは八路軍の構成は国民政府の兵などからなっており、農民からの動員兵はほとんどいなかったが、1942年になると農民から動員された兵が増えだした。しかし、そこでも直接的に農民を正規軍に入れる訳ではなく、民兵に一度所属させてから正規軍に転属するという仕組みが採られたようだ。ただし、1945年ごろになると直接、農民がから正規軍兵になる者が出始めるが、それは戦況が有利になって、正規軍になることのリスクが少ないと判断されたからではないかと考えている。つまり、大衆動員にしる、軍事動員にしる、日中戦争の戦況の変化とその後の中国内戦期といったように周辺状況に応じて見方をおこなっていく必要があるだろう。また、今日はあまり説明がなかったが、新軍事件の前後では大衆運動・

農民運動のあり方がどのように変わったのかを教えて欲しい。

石島：私自身、正規軍の動員に関しては詳細には明らかにできていない。ただし、山西省に関しては閻錫山が民衆の武装を許さなかったこともあり民兵組織が少なく、それを利用した正規軍への取り込みという試みは少なかった。だからこそ、農民の正規軍への直接動員という形が生じた訳である。百団大戦の際には民兵から正規軍という動員の方向性が示されたがあまり上手く行かず、それ以降はかなり慎重におこなわれた形跡がみられる。山西新軍などを正規軍に組み入れることもおこなわれてきたがあまり資料には出ておらず、民兵組織の力はむしろ弱体化していったような形もみられた。

馬場：山東省では一度、農民を民兵組織に組み入れた後にその組織ごと正規軍に組み込むということがおこなわれていたようだ。また、日本軍の敗戦が決まる前後に再び分散させていた正規軍を集めて、国民党との内戦に備えるという事をおこなうが、その過程での正規軍の大規模に向けて農民の直接動員をおこなったのではないだろうか？

吉田：農民や民兵を正規軍として組み入れるには彼らの給料として大金が必要になると考えられるが、そういった資金はどこから出ていたのか？

石島：統一戦線を組んでいた時期には蒋介石の国民政府から出ていたが、1939年にそこから資金供給は止まったとされる。支給供給が止まって以降、共産党がどのように正規軍を賄っていたのかは十分に明らかにできていない。その部分ではアヘンなども絡んでくるかと思われるが詳細は不明である。

張：レジュメの4頁末に「散漫な大衆政党から強固な組織政党」へと述べてあるが、散漫な政党組織とは具体的にどの年代を指すのか。

石島：1920年代末から1930年代にかけては散漫な政党組織を言わざるを得ない。正式な入党手続きもなく、教育も十分にはおこなわれていなかった。

岡崎：民衆武装における武器はどこから入手していたのか？

石島：この時代の民兵の武器は敵からの略取か、あるいは非常に旧式の猟銃や斧などで武装するという形式であった。奪った銃火器などは、まずは遊撃隊に支給され、残ったものが民兵に分配されたとされる。弾薬の補給などは基本的になく、これらも略取品が主体であったと考えられる。

馬場：補足として、山東省における正規軍の給料に関しては、食料などは農民の負担による現物支給であったことが資料に残されている。給料に関して、最初は支給されていたようだが、すぐに食料の支給と代わったようである。質問だが、レジュメにある「遊撃隊」とは地方軍のことであって、正規軍拡大の際にはそこから正規軍に組み入れるということがおこなわれたのでは？

石島：確かに、遊撃隊から正規軍に組み入れるという動きは資料でも確認できる。

柴田：大行を選んだ理由としては、抗日運動のゲリラ戦根拠地として典型的な事例であるからなのか？また、中国のゲリラ戦が、世界史の中での他地域のゲリラ戦と比較してどのような特徴があるのかを教えて欲しい。

石島：丸田氏から大行に関する資料を提供されたことが大きい。ただし、それ以外にも大行には八路軍総司令部や中国共産党北方局があり、中国共産党の指導が入り易かったと言える。そのために共産党の政策の実行過程を見るには非常に適した場所であったと考えられる。ゲリラ戦の位置付けに関しては十分に把握できていない。

馬場：チャルマーズ・ジョンソンという研究者がユーゴにおけるチトー政権による民主運動と中国における抗日戦線とを比較している。そこでは、日本軍に対して協力した傀儡政権への反発も含めたナショナリズムによって立ち上がったとされる。

丸田：笹川裕史氏が『銃後の中国社会』という本を出された際の研究会で、なぜ、そういった散漫な社会が日本軍に勝ったのかという部分に関して、彼らの考えとしては、組織性のない社会の方が圧力に対しては脆弱であるが、分散することでどこからでも抵抗組織が立ち上がり、壊滅させることが難しく、統制された正規軍では制圧が難しいということ述べられていた。

丸田：実際の動員の際には「減租減息」という表だったスローガンよりも具体的なスローガンが用いられたとされる。しかしながら資料では、貧農が共産党に入党するのに「減租減息」というスローガンが有効であったと出ているが、これらのずれは何を示すのか？

石島：華北などの例では、自作農が多く小作農が少なかった為に「減租減息」というスローガンの効力は少なかったと考えられる。「減租減息」の意義として、そのまま厳密な方針と捉えずに、他の政策と複合して地主権力を弱め、それによって地主から貧農への富の移動を促す方針の一環なのかという程度の理解が適当ではないかと思う。

(